



まで出版し続けてきた私が、生涯のベスト 1 映画としてあげるのが、ジュリー・アンドリュース主演のミュージカル映画『サウンド・オブ・ミュージック』(65年)。高2の時に初めて松山の映画館で本作を鑑賞した私は、何と本作を7度も鑑賞した。今ではありえない“ある違法行為”も敢行したから、私の手元にはその時のアルバムもある。そんな同作は、『週刊20世紀シネマ館』の「1965年の名画」でトップに挙げられている。「1965年度キネマ旬報ベスト10」では第9位だ。

私が同作に強い感動を覚えた理由の1つは、高2という感受性の最も豊かな時代に、何の予備知識もないまま同作を観たことだ。同作を観てまぶびっくりさせられたのは、冒頭の“空撮”によって描かれるアルプスの山々だ。日本にも美しい山々の風景はたくさんあるが、何とんでもアルプスの山々の美しさは世界一！そう思っていると、空撮のカメラはどんどん下降していき、最初は豆粒のように映っていたあるものが女性の姿だと分かると、一気にジュリー・アンドリュース扮する修道女姿のマリアがアップで登場し、「The hills are alive With the sound of music」と、本作の主題曲たる『サウンド・オブ・ミュージック』を歌い始めたからビックリ！そんな素晴らしい状況下でジュリー・アンドリュースの素晴らしい歌声を聞いただけで、大興奮かつ大満足！

## ■舞台はオーストリア！時代は1930年代最後の黄金の日々■

冒頭の高原のシークエンスが終わると、教会の鐘の音を聞いたマリアがあわてて走って帰る風景になるが、それは一体なぜ？本作の舞台はオーストリア、時代は1930年代、最後の黄金の日々だ。そして、マリアが急いで戻ったのはモーツアルトの生まれ故郷としても有名なザルツブルクにある修道院だ。

冒頭のアルプスの山々の風景とは一転して、暗く静かに閉ざされた修道院の中で、院長(ペギー・ウッド)や修道女たちが歌うマリアについての歌を聞いていると、歌や山歩きが大好きで、なかなか修行に身の入らないマリアを修道院全体が持て余していることがよくわかる。そこで院長は、妻を亡くしたトラップ大佐(クリストファー・プラマー)の家にマリアを7人の子供たちの家庭教師として送り出す方針を伝えることに。もちろん、マリアは「修道院に留めてほしい」と懇願したが、何ゴトも神の御心のままに……。

「自信を持って」と歌いながら、マリアは単身トラップ大佐の“お屋敷”にたどり着いたが、そこでは栄光ある(退役)海軍大佐トラップが、家庭では厳格な父親として、何よりも規律を重視しながら、16歳の長女リーズル(シャーミアン・カー)をはじめとする7人の子どもたちを笛で行進させる風景に注目！坂和総合法律事務所では伊ソ弁(勤務弁護士)や事務員はよほど優秀でなければ務まらなかったから、何人も事実上クビになっていたが、そんな厳格な教育方針を持ったトラップ大佐のお眼鏡にかなう家庭教師はこれまで一人もおらず、次々とクビにされていたらしい。

トラップ一家は「規律が第一」。そう聞かされたマリアが面食らったのは当然だが、翌日から大佐が交際中の男爵夫人エルザ(エリノア・パーカー)の住むウィーンに出かけてい

くと、マリアはたちまち野生児(?)たる本領を發揮!子供たちには囚人服のような制服ではなく、自由に着て、自由に汚せる遊び着が必要と考えたマリアは、総入れ替えをするカーテンから7人分のそれを作り、ギターとお弁当を持って山遊びに出かけることに…。

## ■□■本作で観る『ドレミの歌』は最高!■□■

日本でも『ドレミの歌』の日本語版が大ヒットしたが、オーストリアの山の上の広々とした開放感の中で、楽しく走り回りながらマリアと7人の子供たちが歌う『ドレミの歌』は最高!よくぞここまで見事に、歌と踊りと風景を融合させた映像を作り出したものと感心しきりだ。狭い日本と違い、オーストリアの山々は広い。また、トラップ大佐のお屋敷は一目見ただけでマリアが一瞬怯えてしまったように、お屋敷というよりもお城といった方がふさわしいものだ。木登りならともかく、家の中の庭を流れる川で船遊びをするなんて、日本ではとてもとても…。

トラップ大佐が男爵夫人に会うためにウィーンに赴き、長期滞在になっている間、マリアと7人の子供たちは歌や踊りを通じてすっかり仲良しになっていた。車でお屋敷に戻ってくる大佐と男爵夫人そして友人のマックス(リチャード・ヘイドン)たちが一瞬目にした、木登りをしているガキたちは一体ダレ?そう思っていると、戻ってきた大佐たちを出迎えたのは、船遊びをしているマリアと7人の子供たちだった。そして、船上で興奮したマリアや子供たちが立ち上がると、たちまち傾いた船から全員が川の中へ飛び込んでしまったから、アレレ、アレレ。父親がウィーンに滞在している間、子供たちは厳格な規律の下で、家庭教師のマリアが教育しているのではなかったの?

## ■□■恋の進展は?互いの思いは?■□■

シェイクスピアの名作『ロミオとジュリエット』は、最初から「恋物語」だとわかる上、敵対するグループ同士の男女の恋物語だという事情がわかってくるにつれて、「悲恋物語」に変わっていく姿が興味深かった。しかし、マリアがあまり修道女に向いていないと判断された結果、家庭教師に“配属替え”される本作では、恋物語は全く想定されないもの。しかも、本作では妻を失い目下独身状態にあるトラップ大佐の、次の結婚相手は男爵夫人と決まっているのだから、なおさらだ。その上、最初からマリアの価値観とトラップ大佐のそれが大きく異なっていることも明らかだ。

マリアは大佐がウィーンに出向いている間に子供たちとの楽しい関係を築けたものの、それは大佐が最も大切に「規律」を無視したのだから、その実態を目の当たりにした大佐がマリアに対して“クビ宣言”を下したのは当然。そのため、マリアは1通の手紙を残したまま、子供たちと挨拶(別れ)もしないまま、失意の下に修道院に戻り、1人で部屋の中にももってしまうことに。他方、マリアがいなくなったことですっかり陰気になってしまったトラップ大佐一家では、新たな母親と子供たちとの楽しい関係が築けないまま、ギクシャク状態が続いていた。

そんな状況下、子供たちが父親に内緒で修道院を訪れると、マリアとの面会はかなわな

かったものの、マリアの告白（正直な気持ち）を聞き、その真意を理解した院長は再びマリアをトラップ大佐の家に戻すことに。他方、院長の気持ちを理解し、自分に正直になると決めたマリアがお屋敷に戻り、子どもたちと再会すると・・・？さあ、そこから始まるマリアとトラップ大佐との“大人の恋”の展開に注目！なるほど、なるほど。マリアもトラップ大佐も、互いの思いは最初に出会った時から・・・。

## ■□■トラップファミリーシンガーズの誕生はお屋敷内から！■□■

私は小さいながらも自宅でのホームパーティや事務所での友人知人を招いてのパーティが大好きだが、本作を観ていると、やはりホームパーティはトラップ大佐のお屋敷のような巨大なお城で開催するのがお似合い！新しいママを迎え入れることを前提としたトラップ家のホームパーティは、マリアと7人の子供たちの自主企画だが、そこで歌われる『ひとりぼっちの羊飼い / The Lonely Goatherd』は、ヨーデルによる見事な人形劇の曲だから超見モノ（聴きモノ）！また、就寝時間を厳守しなければならないトラップ一家では、ホームパーティでも『さようならごきげんよう / So Long, Farewell』を歌いながら1人ずつ部屋に消えていくので、それにも注目！

他方、マリアが家庭教師としてお屋敷に入ったことによって、お屋敷内に歌が復活したことを知ったトラップ大佐は、マリアに勧められるままに、ギターで『エーデルワイス / Edelweiss』を弾き語りしたが、その歌唱力はなかなかのものだ。また、長女リーズルは恋人のロルフ（ダニエル・トゥルーヒット）との間で、『もうすぐ17才 / Sixteen Going On Seventeen』を歌いながら恋の予感にときめいていたし、マリアとトラップ大佐もある夜、『何かよいこと / Something Good』を歌いながら互いの思いを確認し合っていた。

ちなみに、本作で歌われる曲は名曲揃いだが、その代表曲は次のとおりだ。

サウンド・オブ・ミュージック / The Sound of Music
私のお気に入り / My Favorite Things
ドレミの歌 / Do-Re-Mi
エーデルワイス / Edelweiss
マリア / Maria
自信を持って / I Have Confidence
もうすぐ17才 / Sixteen Going On Seventeen
すべての山へ登れ / Climb Ev'ry Mountain
ひとりぼっちの羊飼い / The Lonely Goatherd
何かよいこと / Something Good
さようならごきげんよう / So Long, Farewell
行列聖歌とマリア / Processional And Maria

そんなトラップファミリーの歌唱力に目をつけたのが、トラップ大佐と男爵夫人の共通の友人であるマックス。1930年代後半、ナチス・ヒトラーが抬頭する中、オーストリアは

ナチス併合の危機を深め、トラップ大佐はそれを憂慮していたが、そんな中、近々地元で開催されるのが合唱コンクールだ。マックスはトラップファミリーシンガーズをこの音楽祭に出場させて売り込もうとしたが、もちろん大佐はそんな売名行為には拒否反応を！しかし、誰がどう見てもトラップファミリーシンガーズの実力はピカイチだが・・・。

### ■□■結婚式は荘厳なミサ曲！そう思ったが、意外にも！？■□■

リーズルとロルフとの「恋の行方」は本作中盤ではわからないまま、ラストで意外な“別れ”が待っているので、それに注目！それに対して、マリアとトラップ大佐との「恋の行方」は、男爵夫人の状況理解力と身の引き方が早いことと相まって、極めて順調だ。2人でしっかりと『何かよいこと / Something Good』を歌い上げた直後に、「これぞザルツブルグ！」と感嘆させられること間違いなしの、超豪華な教会内でのトラップ大佐とマリアとの結婚式のシーンになるので、それにも注目だ。そんな教会での古式豊かな結婚式となると、そこに流れる音楽は荘厳なミサ曲！そう思っていると、それは『行列聖歌とマリア / Processional And Maria』だから、これにも注目！

これは、導入部で修道院長や修道女たちが掛け合いで、楽しく（面白おかしく？）歌っていたマリアについての歌だが、これを結婚式のための行列聖歌に変奏して高らかに歌い上げられるので、それにも注目！

### ■□■早々に新婚旅行を切り上げ！状況は風雲急を！■□■

結婚式が終われば、次は新婚旅行。トラップ大佐クラスの大金持ちなら、新婚旅行は思い切って数ヶ月間の世界一周旅行へ！もちろん、それも有りだが、時代はオーストリア1930年代最後の黄金時代、ナチスの勢力が急拡大し、オーストリア併合の危機が迫っている時代だ。当然それを察知しているトラップ大佐が早々に新婚旅行を切り上げて自宅に戻ってくると、お屋敷の玄関には巨大なカギ十字のドイツ国旗が！事態がここまで風雲急を告げているとは！

大佐はカギ十字のドイツ国旗を破り捨てたが、大佐に手渡されたナチス（第三帝国）からの電報は、オーストリア海軍の退役大佐たるトラップに対するドイツ海軍からの招集と出頭命令だったから、さあ大変。しかも、出頭期限は明日までだ。大佐を護送する体制もバッチリ取られていたから、トラップ大佐の抵抗もここまで・・・？いやいや、さにあらず。そこから見せるトラップ大佐の底力とは！？

### ■□■大佐の決断は亡命！しかし、そんなことが可能なの？■□■

日本初の女性総理となった高市早苗氏が最初に受けた試練は、26年間も連立関係にあった公明党の連立離脱という想定外の事態の発生だった。ところが、それに対する高市総理の決断は早く、その数日後には日本維新の会の吉村洋文代表との会談によって、直ちに「自維の連立政権（閣外協力）」を実現させたからすごい。その突然の変化とそのスピードに世間はビックリ！高市早苗総理の決断力は素晴らしかった。

それと同じように、ドイツ海軍からの出頭命令を受けたトラップ大佐の決断も早かった。

つまり、ナチス・ヒトラーの命令に従う気のない彼は、その場で直ちに“亡命”を決意したわけだ。しかし、あんなお城のようなお屋敷もすべて捨ててしまうの？ 一体どうやって亡命するの？ そんなことは可能なの？ 現実にはそんな心配が大きいのが、本作はミュージカル映画でシリアスな「スパイモノ」ではないから、その演出や説明はほどほどでOK・・・？

## ■□■音楽祭への出場は？『エーデルワイス』に思わず涙！■□■

亡命の実行はまず、一家で車に乗るところから。しかし、車のエンジンを止めた状態でお屋敷からコソコソと出た段階でトラップ一家はすぐにナチスに発見されてしまったから、もはや万事休す。本来はそのはずだが、その点ロバート・ワイズ監督の演出はぬかりがない。本作はそこからマックスの手配によるザルツブルグの祝祭劇場で行われる歌唱コンクールへのシークエンスになる展開が素晴らしいので、それに注目！

この歌唱コンクールで歌われるトラップファミリーシンガーズの曲は、お屋敷のパーティでの名曲をアレンジしたものだから聞き応えがある。さらに、トラップ大佐が祖国オーストリアへの万感の思いを込めて、会場の皆さんへの別れを歌う『エーデルワイス』はすばらしい。会場を埋め尽くしたオーストリア国民はこれを万感の思いで聴いたはずだ。そんな思いをスクリーン上から感じ取った私の目にも思わず涙が……。その結果、受賞者は3位から発表されたが、何とトラップファミリーシンガーズは優勝の栄誉を！ところが、優勝者を迎えるべく当てられたスポットライトの先に、トラップ一家の姿は……？

## ■□■『すべての山へ登れ』の名曲が流れる中でジ・エンド！■□■

1930年代後半、急拡大するナチスドイツ（第三帝国）からの亡命はいかに？ それはもちろん想像の世界でしかないが、本作のモデルとなったトラップ一家がアメリカに渡って音楽活動を続けたのは歴史上の事実だ。しかし、本作はそれをどう描くの？

そう思っていると、そのシークエンスは本作ラストのほんの数分だけ。そして、それは広大なアルプスの山々をトラップ一家が歩いて進んでいく姿だからビックリ！そして、そこで流れる曲は『すべての山へ登れ / Climb Ev'ry Mountain』だ。これは今の日本でもコマーシャルで流されている名曲だ。

『The Sound of Music』と題された本作は、1930年代オーストリア最後の黄金時代の中で生まれた、修道女マリアとトラップ大佐一家との運命的な出会いをテーマにしたものだが、そのラストはマリアを含むトラップ一家のオーストリアからアメリカへの亡命という劇的な映像で終わるからすごい。本作の上映時間は174分、その間飽きることは絶対がない。また、7度観ても飽きることはなく、また観たいと思う映画だ。1965年の高2という多感な青春真っ盛り時代の時代にこんな素晴らしい映画に巡り合えた幸運に感謝！そして、60年後の2025年に再び大スクリーンでそんな名作を観ることができたことに感謝！さらに、英語の歌詞を必死で覚えた名曲の数々を76歳にして再び聴くことができたことに感謝！多くのシーンで思わず涙が溢れてくることになったのは年のせいだろうが、まさに名作は永久だということを実感！

2025（令和7）年11月26日記